

令和5年1月20日

【巻頭言】

(理事長 野々村好三)

寒さ厳しい季節を迎えております。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

さて、昨年12月には本会も協力団体として携わっている、点字考案200年記念事業推進委員会が「記念講演会&シンポジウム」を開催しました。

前WBU会長のフレドリック・K・シュローダー博士の講演においては、「効率性ではなく、ユーザーのニーズを基本に据えなければならない」と繰り返し述べておられたことが印象的です。また、シンポジウムでは各発言者の方から、点字を守り発展させていきたいという熱い意気込みが伝わってきました。中でも、「子どもたちが、点字を通して友だちや社会とつながってほしい」という、奥野真里さんの『アミ・ドウ・ブライユ』（日本ライトハウス発行の児童向け点字雑誌）編集にかける思いに感じ入りました。

子どもたちが点字を通して知識を自分のものにし、点字使用者として誇りをもって歩んでいけるよう、私たちが精いっぱいサポートしていきたいと思っております。2023年卯年、皆様と共に飛躍の年にしてまいりましょう。

【令和4年度 第3回（通算35回）セミナーのご案内】

「小中学生にわかりやすい点字教材を届けるために」

～副教材製作の現場から～

日時：2023年2月25日（土）10:00～11:30

Zoom オンライン（ライブ）

おはなし：濱崎雄三氏（大阪市立早川福祉会館点字図書室）

山本有美子氏（パソコン点訳会）

今回の教点連セミナーでは、《副教材》を取り上げます。副教材は学年が上がるに連れて重要度が増すにも関わらず、児童・生徒に十分に行き渡っていないのが実情です。また、重複製作、一部の施設・団体への集中、分量の多さや内容の複雑さなど多くの課題があります。そこでお二人からの事例報告を通して、これらの問題について考えます。

濱崎さんは先天性の視覚障害者で、特別支援学校を経て、地域の高校へ入学、現在は点字図書館職員です。山本さんは、大阪府池田市の「パソコン点訳会」に所属し、小中学生の副教材点訳に取り組んでおられます。

お二人から副教材製作を行う中での現場の奮闘や工夫、どこに改良の余地があるのかなどについてお話しいただき、濱崎さんにはご自身の高校時代の様子も伺います。皆様からの事前質問を歓迎いたします。

点字の副教材製作・提供の今後の在り方について、皆様と共に考えを深められれば幸いです。ぜひ多くの方のご参加をお願いいたします。

プログラム

- 10：00 開会挨拶
- 10：10 事例報告：濱崎雄三氏、山本有美子氏
- 10：50 質疑応答と意見交換
- 11：25 諸連絡など
- 11：30 閉会

対 象：本会会員、点字教科書・教材製作に携わっておられる方、ご関心のある方

定 員：先着 80 名（オンライン参加）

参加費：無料

お申し込み・問い合わせ：2月15日（水）までに、氏名、所属、メールアドレスを次のところにお送りください。info@kyotenren.org（本会代表アドレス：担当 山岸）
お申し込みから数日以内に返信メールをお送りいたします。

（濱崎さん、山本さんへのご質問も、2月15日までにお寄せください。）

【会員用、新メーリングリストについて】

本会では昨年の事務局移転に伴い、ホームページを移転するとともに、会員用メーリングリストを、新しいものに移行しました。点字教科書の製作調整、会員間の情報共有等に活用してまいります。

とはいえ、現時点で、すべての会員の方がこのメーリングリストに参加されているわけではありません。本会会員で、このメーリングリストに参加を希望される方は、次のところまでお申込みください。なお特に申込期限を設けるものではありません。どうぞ宜しくお願いいたします。

※本メーリングリストは同じ所属で複数人ご登録いただいて結構です。

お申し込み・お問い合わせ：本会代表アドレス info@kyotenren.org

【令和4年度第2回（通算第34回）セミナーのご報告】

テーマ：見る図と触る図の大きな違い～点字教科書における触図作成の基礎知識

日時：令和4年12月3日（土）10：00～11：45

開催方法：Zoom オンライン（ライブ）

講師：加藤俊和氏（理科点字表記解説 2019 年版「図表について」担当）

参加者：67名

教科書点訳において理数系教科だけでなく、社会や技術・家庭・保健体育など幅広い科目で触図が必要となります。教科書のビジュアル化がますます進む昨今において触図作成は頭を悩ませる課題です。そこで今回のセミナーは、触図の基礎知識を取り上げました。参加者の多くが、実際、点字教科書製作に携わるボランティアの方でした。

今回のセミナーに先立って参加者全員にエーデルで作成した触図8枚を点字プリントし送付しました。講師の加藤さんは講義の冒頭で、今回のセミナーでは実際に触図に触れて触図の特性を理解してほしいと点字プリントした触図を複数用意した意図を強調され、「見る図と触る図の根本的な違い＝触読の特性から求められる配慮と工夫」について具体例を交えて講義いただきました。

前半は「触図を理解するということはどういうことなのか」という最も基本的な事柄について説明がありました。

- ・「目で見える図」は「一目」で理解できるが、「触図」は「一触」で分かるものではないこと。

- ・触図は「細切れ情報の記憶」であり、小さい指先からの情報をスキャニングして読み取るしかなく、全体を見渡せないこと。つまり指先を動かして記憶する作業の連続であること。

- ・触図は細切れ情報を記憶し、頭の中に全体図を描かなければならないため、読み取るのに相当な時間がかかること。たとえるなら、1文字しか見えない電光掲示板でニュースを読むような、図の上に小さい穴だけをあけた厚紙をこまめに動かして読むようなものであること。

目で見える図と異なり簡単に素早く理解できるものではないことを理解し、そのうえで作成することが必要であることを強調されました。

次に触図には「遠近感」「立体視」がないことについて触れられました。触図は形や配置を触って把握することができますが、「見る図の遠近感、立体感」は眼で見るときだけのもので触覚にはなく、立体を表す斜めの線も説明と学習がなければ理解できない

ものであることを説明されました。

続いて触図で伝えうる情報は原図の数千分の1であることに触れ、墨字の図をそのまま盛り上げて、その情報をすべて伝えることは不可能であり、触覚で理解できる重要な情報に絞る必要があると述べられました。つまり触図を作成する第1歩は図形に載せる情報を必要最小限に厳選することだと説明されました。

触図の読み取りの力は視覚障害者個々で差が非常に大きいことにも触れ、視覚経験（目を見た経験）があるかどうかという単純なことではなく、図だけで理解する見る図と異なり触図に添えられている点字が読めることも、触図を理解する上で重要になるとのこと。

これらの触図の基礎については日本点字委員会発行の『理科点字表記解説 2019年版』（p67～91）第5部「図表について」に記載されているとの紹介もありました。

後半は前半の内容を踏まえ、具体例を用いて「何をどのように触図化する必要があるのか」についてお話いただきました。

墨字の教科書や資料には、図や写真、マンガや動画が満載です。これらはまさに「見れば分かる」ものです。「触る」点字では、「一触で分かる」はずはなく、「言葉で理解、触図で補う」が原則のため、文章で理解できる場合は、図を省略するというのを念頭に置くことが必要だとのこと。「墨字を忠実に点訳」とは墨字で表されている図や写真・イラストを、すべてそのまま触図化することではなく、「見る図の内容を触覚で理解できる図にすることが「内容を忠実に伝える点訳」だと説明されました。触覚で理解できる図であれば文章との相乗効果で内容を深く理解することが可能となるとのこと。

教科書製作の際、多く用いられる触図作成ソフト「エーデル」についても、目で見たい印象と触覚的な印象では異なることを説明されました。点・線の区別は、3（大・中・小の点）×18（点間の種類）=54種類ではなく、触感上は、せいぜい4、5種類であるということを強調され、だからこそ触図化する際、墨字の図の中の何を触図化するかというデフォルメ作業が最も重要なのだとのこと。

事前配布した資料はエーデルで作成したものであったので、それらや他の原図を例示しながら、グラフの線の重なり方を簡略化したり、実験道具の不要部分を省略したり、引き出し線を省いたりなどの事例を紹介いただきました。

質疑応答では触図化するものとそうでないものをいかに見極めるかについてや、宇宙誕生の素粒子の触図化についてや、線と文字（点字）との距離感についてなど多数声があがりました。そこでも触ることで理解できることを念頭に回答していただきました。

触図のセミナーの場合、具体的な方法論に偏りがちですが、加藤さんのお話は「触る」ということがどういうことなのか、という前提を繰り返し分かりやすい表現でおはなしいただきました。迷うものほど前提や原則が重要になります。そういう点でも参加者にとって今後の活動に大きく役立てていただける内容となりました。

【文科省とのオンライン懇談会報告】

昨年12月7日（水）に、オンラインにて文部科学省と懇談会を行いました。文科省教科書課の係長お二人と、当会から理事長の野々村、事務局長の奥野、点字教科書製作館の立場として日本ライトハウス情報文化センターの竹下館長を含む3人が出席しました。

まず、昨年秋に会員に向けて実施したアンケートを元に、点訳ボランティアの減少と点字教科書の製作依頼が増加している現状を説明しました。今後、安定した良質な点字教科書を現場に提供するためには、点訳者の確保が急務であり、製作費が十分ではなく現状に見合う価格に上げていただきたいこと、点字教科書をコーディネートしていく事務局体制を整えるための助成を行ってほしいことを求めました。また、実際製作した点字教科書の画像を示しながら、墨字教科書との違いや工夫点、点字教科書として配慮している点などを説明しました。

また、インクルーシブ教育を受ける点字使用の児童・生徒の学年、および、人数の情報を本会に共有してほしいことについても求めました。

これに対し、文科省から製作に関することについて質問があり、今後の検討事項について話し合いました。

今後も継続的に文科省に現状を説明し、より円滑に点字教科書を届けられるよう整備していきたいと思えます。会員の皆様にも現状把握等の面でご協力をお願いするかと思えますが、その際はどうぞよろしく願いいたします。

【教科書点訳連絡会 第5回理事会記録】

日 時：2022年11月5日（土）10：00～12：00

参加者：池村、加藤、込山、鈴、長岡、野々村、藤下、牟田口、山本、奥野

場 所：オンライン

1. 12月3日の今年度第2回オンラインセミナーについて確認した。
2. 2月の第3回目オンラインセミナーについて内容を検討した。
3. 会員向けグループ状況アンケートの結果報告と文科省への働きかけについて
13団体からアンケートの回答があり、うち、3団体はこの5年間、教科書点訳の実績がなかった。5年前と今年度と比較すると、教科書の製作点数は増加しているのに対し、ボランティアの活動数は減少していることが数値からも明らかになった。

今回の文科省への働きかけでは、

- ・インクルーシブ教育を受ける児童生徒の実態把握
- ・全国の子どもたちに点字教科書・教材が行き渡るよう、点訳供給を安定化できる対

策を講じること

・製作費の引き上げ
などが挙げられた。

4. 12月10日に予定されている点字考案200年記念事業推進委員会主催の、第2回記念講演会&シンポジウムについて報告があり、会員MLに情報を流すことになった。

5. ホームページ、新会員向けMLの移転について

①ホームページの更新について

ホームページで更新する内容や、教科書点訳の進捗状況を毎月月末にまとめ、翌月の十日に更新する。

②新メーリングリストについて

新会員向けMLの移転に向けて、使用者が不明なアドレスも多いため、現在のMLで会員全員に新MLへの移行確認を行うことになった。

今後のMLの運営などの関連から、会員、非会員のすみ分けについて議論された。MLとしては、会員向けのMLも必要ではないか。実際の点訳においては、非会員の施設・団体に協力してもらわないと支援が立ち行かなくなるのではないか、という意見があった。

6. 次回の「教点連ニュース」発行について確認した。

【教科書点訳連絡会 第6回理事会記録】

日 時：2022年12月17日（土）10：00～12：00

参加者：池村、加藤、野々村、藤下、三上、牟田口、奥野

1. 2月の第3回オンラインセミナーについて

講師や、広報、申し込み期日について話し合った。

また、今後のセミナーの持ち方についても話し合った。

・会員・非会員に関係なく、幅広く参加してもらえるよう公開セミナーを行う。

・専門的な内容や点訳技術に関することを取り上げる場合は、参加費を非会員から徴収する。

などが提案された。

2. 12月7日（水）に行った文科省とのオンライン懇談会について報告があった。

3. 新規メーリングリストへの移行について検討した。

今後も会員用MLを運用し、セミナーなどで会員への新規入会を呼びかける。

教科書・教材点訳に関心のある人用のMLを作ってはどうかという提案があった。

4. 年会費の振り込み、入会申し込みについて

年会費を振替口座だけでなく、郵貯銀行預金口座にも入金してもらえるように事務局で手続きを行うことになった。

なお、入会申込書の最後の欄にあった「署名」、「捺印」の欄を削除し、メールでも

入会届ができるように変更となった。

5. その他

① ホームページについて

教点連の沿革や、財政状況をホームページに掲載することとなり、「教点連とは」のところにページを設ける予定。

② 副教材について

・副教材についても、市教委・学校から教点連に連絡してもらい、調整できないか。
→副教材も幅広く、ドリルや参考書、プリントなどさまざまで、すみ分けをどこまでできるか。

→副教材も保証されるべきものであり、予算がつかないことで、点訳されずに過ぎてしまっはいけない。

→継続して副教材点訳についてもおかれている状況を問題提起していくことが重要。

・学校等から問い合わせを受けたグループで副教材点訳の依頼を受けられない場合は、会員 ML で他の点訳グループに呼び掛けてみる。

※次回の理事会は、1月28日（土）の予定。

以上。

発行日：令和5年1月20日

発行所：NPO法人全国視覚障害児童・生徒用教科書点訳連絡会

ホームページ：<http://kyotenren.web.fc2.com/>

発行人：野々村好三

ニュース発送元：（社福）名古屋ライトハウス法人本部

〒466-0855

名古屋市昭和区川名本町1丁目2番地

本会E-mail：info@kyotenren.org

振込口座番号：0180-7-262151

口座名義：全国視覚障害児童・生徒用教科書点訳連絡会